

表VII-2-1 タブコブ式土器片囲い炉一覧表

所在地	遺跡名	遺構名	炉種類	形状	個体数	分類	挿図	特記事項	文献
北広島市	南の里14	M14-H1	屋内炉	楕円形	1	c		石囲い炉に併用	
		土器敷き炉	屋外炉	楕円形	1	a		安山岩礫が付属	遠藤2000
恵庭市	南島松3	2号炉址	屋外炉	楕円形	4	e?	28	手稻砂山式・大津式共伴	松谷1992
	カリンバ2	炉5	屋外炉	不整形	1	不明		胴部片	上屋・佐藤1998
	カリンバ4	H-3・HF-1	屋内炉	円形	1	b			森1997
		H-3・HF-1	屋内炉?	楕円形	1	e	26		森1999
	ユカンボシE7	H-4・HF-1	屋内炉?	楕円形	4	d+e			
		2HF-4	屋内炉	楕円形	1	a	1		北埋調報132
		3HF-4	屋内炉	楕円形	1	a	2		
千歳市	ユカンボシE10	8HF-3	屋内炉	不整形	1	不明		胴部片	北埋調報129
		土器片囲炉	屋外炉	楕円形	1	不明		胴部片	渡辺1997
	ユカンボシC15	H-28・HF-1	屋内炉	楕円形	1	a	3		北埋調報133
	オサツ14	H-28・HF-1	屋内炉	楕円形	4	a	4		北埋調報96
	キウス4	P-85	屋内炉?	不整形	4	d	20	土坑内・入江式と共に	北埋調報152
		P-140・F-2228	屋内炉?	楕円形	1	a	5	竪穴遺構内	北埋調報157
	キウス7	LF-15	屋外炉	楕円形	2	a+b	6, 7		北埋調報90
		H-8・HF-1	屋内炉?	楕円形	3	e+?		胴～底部、平地住居	北埋調報105
		LH-43・HF-4	屋内炉	楕円形	1	b	9		北埋調報127
	丸子山	土器囲炉1	屋外炉	楕円形	2	b	10		田村・高橋1994
		土器囲炉3	屋外炉	楕円形	2	e	27		
	イヨマイ6	II F-50	屋外炉	楕円形	2	b+c			高橋・田村1990
苫小牧市	タブコブ	15号住居跡・炉	屋内炉	楕円形	1	e		不規則な配置	
		土器片囲炉1	屋外炉	楕円形	2	b	11		
		土器片囲炉2	屋外炉	円形	1	d	21		
		土器片囲炉3	屋外炉	楕円形	7	c+d+e	14, 22	2カ所が切り合う	
	柏原18	11号焼土跡	屋外炉	不整形	1	d	23		
		39号焼土跡	屋外炉	円形	2	d+e	24, 30		
		50号焼土跡	屋外炉	楕円形	1	d			
	柏原5	73号焼土跡	屋外炉	楕円形	3	b+e			
		84号焼土跡	屋外炉	円形	5	a+b	8		佐藤・工藤ほか1997
	静川	3号住居跡・炉	屋内炉	楕円形	1	b	12		
		F-15	屋外炉	円形	2	不明		胴部片・礫と併用	赤石2002
	静川25	24号住居跡・炉	屋内炉	楕円形	1	e	31	一部欠落(再利用?)	宮夫・工藤ほか2002a
	静川8	30号焼土跡	屋外炉	不整形	1	c		一部のみ残存	佐藤・工藤ほか1990
	静川37	3号住居跡・炉	屋内炉	円形	2	c+e	29	一部欠落	
		4号住居跡・炉1	屋内炉	円形	3	c		一部のみ残存	
		4号住居跡・炉2	屋内炉	方形	2	c			
		6号住居跡・炉1	屋内炉	楕円形	3	c+e	15, 16	一部欠落	
		8号住居跡・炉1	屋内炉	円形	2	c+e		一部欠落	
		8号住居跡・炉2	屋内炉	円形	1	e		一部のみ残存	
		9号住居跡・炉1	屋内炉	楕円形	1	c	17	炉の内側に焼土なし	
厚真町	厚真7	6号住居跡・炉	屋内炉	楕円形	3	c+e			
		7号住居跡・炉	屋内炉	楕円形	4	d+e	25		
鶴川町	宮戸4	H-2 土器片囲い炉	屋外炉	楕円形	5	c+e	18, 19	一部が二重になる	本報告
門別町	エサンヌップ2	H-29内炉	屋内炉	楕円形	1	b	13		長谷山・阿部1989

※ 千歳市オルイカ1遺跡は平成14年度報告予定(北埋調報188)

(2) 形態・構造

形態は、土器片が部分的にしか残存しておらず、全体の構造を把握できないものが多いが、概ね橢円形・円形である。タブコプ式の土器片圓い炉は、厚真7遺跡の分類ではBタイプに属する（佐藤・工藤ほか 1987）。土器の外面を内側へ向けて、浅い掘り込みの周囲に並べる、または壁面に貼り付けるもので、他に手稻砂山式が用いられる。ちなみにAタイプは、土器の内面を内側へ向けて、破片を垂直に差し込み、方形に並べるもので、北筒式（トコロ6類）・入江Ⅲ類が用いられる。

土器片圓い炉は屋内炉と屋外炉の両方が見られる。遺跡により様相は異なっており、屋内炉が主体となる遺跡は、カリンバ4・ユカンボシE7・静川37・厚真7など、屋外炉が主体となる遺跡は、丸子山・柏原18・柏原5などである。また、キウス7・タブコプ・静川など、両方が存在する遺跡も見られる。これらが地域差あるいは時期差を示すものか、用途によって場所を変えたのか判然としない。

使用されている土器は1個体が多いが、2個体以上用いるものもある。接合関係がわかる出土状況図が掲載されていないものが多く、土器の各部位がどのように配置されているか把握できなかった。

宮戸4遺跡H-2は、Bタイプに属する屋外炉である。使用されている土器が5個体と比較的多く、隙間無くほぼ全周しており、残存状況は良好である。一部で破片を二重にするなど独自の要素も見られる。出土位置と接合の結果から、個体ごとに破片を順番に並べるのではなく、ある程度同じ大きさの破片を、部位に関係なく前後で高さが揃うように配置している。規則性というよりは、全体の均衡や強度を重視したのではなかろうか。

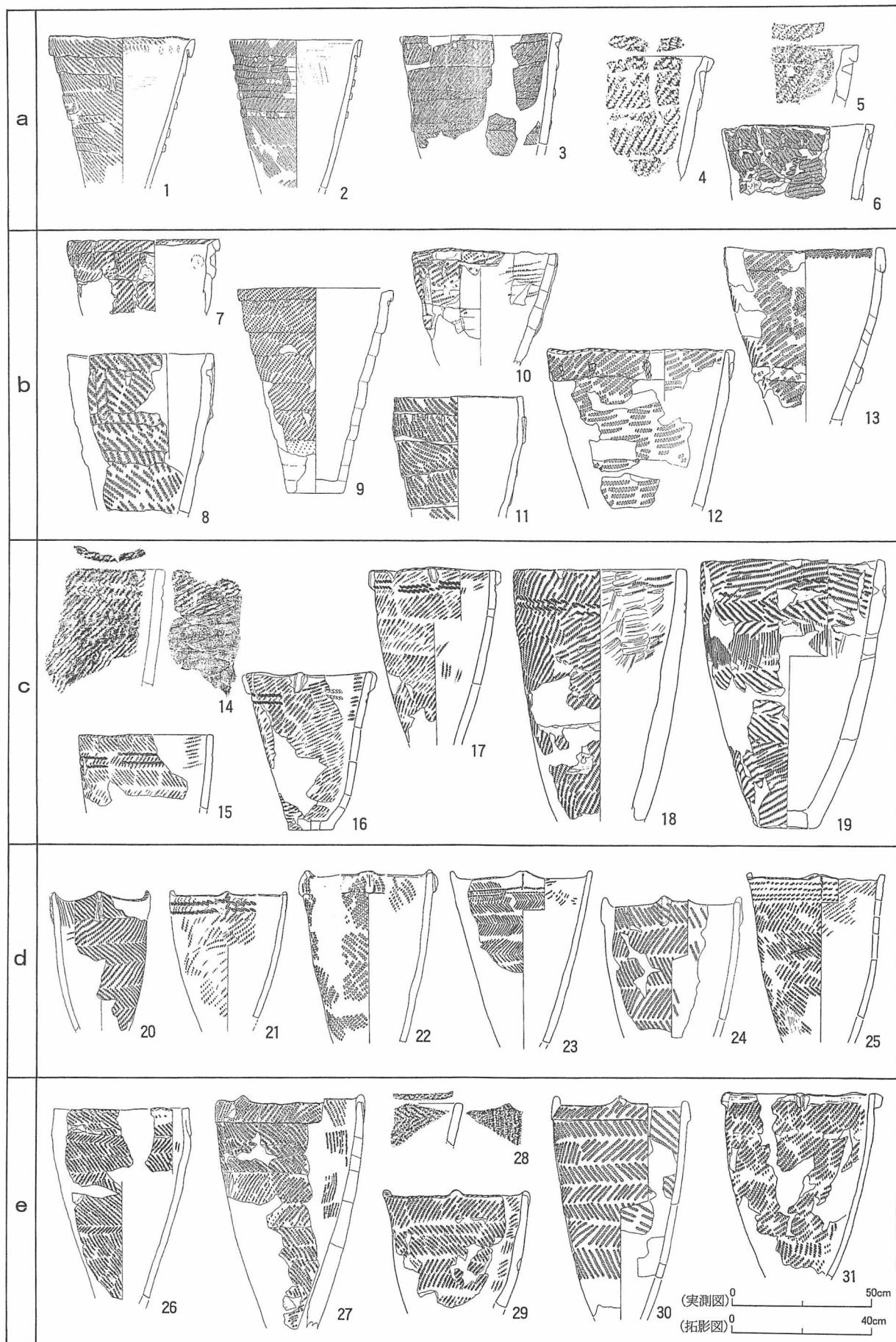
(3) 使用されているタブコプ式土器について

宮夫靖夫氏による型式設定（佐藤・宮夫ほか 1984）以来、主に苦東遺跡群の一連の報告書において、タブコプ式土器は細分が試みられてきた。ここでは出土量が多く、様々な類型が見られるという観点から、柏原18遺跡での赤石慎三氏による細分類（佐藤・宮夫ほか 1995）を参考にして、施文により次の5種類に分類した。

- a類：竹管または棒状工具による下方からの円形刺突文を施すもの
- b類：縄端による刺突文・圧痕文を巡らすもの
- c類：縄線文を施すもの
- d類：山形突起の下に貼付帯や縄圧痕文を施すもの
- e類：縄文のみのもの

図VII-2-2に土器片圓い炉に用いられたタブコプ式土器を分類別に示した。a類は胴部に縦状の貼付帯を巡らす、小野幌式・伊達山式との共通点を有するものである。大沼忠春氏は下方からの刺突を余市式でも新しい要素と捉えており（大沼 1981）、高橋理氏もこの一群をタブコプ式と見なしている（高橋 1996）。b類は胴部の貼付帯が少なく、かつ大振りになる。また、輪積みの下端を残して、器面が段状になるものがある。まれに縄端以外の工具による縦方向の圧痕文も見られる。c類は口縁部付近に数条の横走する縄線文を巡らすもので、平縁が多い。縄線文は2条が最も一般的で、まれに3条、4条も見られる。縄線文は全周しないものが大半で、山形突起や貼付帯などを単位の区切りとする例がある。d類は口縁の頂部または山形突起に、縦方向の貼付帯または垂下する縄圧痕文や縄線文が施されるもので、口縁がやや開きぎみになる傾向がある。e類は口縁が平縁とd類よりも小振りな小突起部を有するものがある。

地域により主体的に使用される土器に違いが見られる。恵庭および千歳西部では、a類およびb類が比較的多い。千歳東部では、a・b類よりもd・e類が目立つようになる。以上の石狩低地帶中部では、c類は非常に少ない。苦小牧を中心とする石狩低地帶南部では、a類を除くb～e類各種が見



図VII-2-2 炉材として使用されたタプコフ式土器

られる。遺跡によって主体は異なるが、c類とe類が多く、d類がこれに次ぐようである。また、日高西部のエサンヌップ2遺跡ではb類が用いられている。

(4) 時期

次に、この分類が時期を反映するものか検討する。2つの炉が切り合う、タプコプ遺跡・土器片囲い炉3の例でも、新旧の両方でほぼ同じ分類のもの（b・c・e類）が使用されていることから、時期が近接している可能性がある。赤石氏は、各遺跡における土器の在り方と土器片囲い炉に使われる土器のセット関係から、タプコプ式を、b類を主体とする時期（古）と、cないしe類を主体とし、d類を伴う時期（新）、という時間差を想定している（佐藤・宮夫ほか 1995）。また、これを大沼氏が設定したタプコプ式の、北筒Ⅲ式（新）に対応する古段階および北筒Ⅳ式に対応する新段階（大沼 1989）に対比させている。エサンヌップ2遺跡H-27では、b類が北筒Ⅲ式と共に伴っている（長谷山・阿部 1989）。一方、南島松3遺跡B地点2号炉址では、e類が手稻砂山式・入江式と（松谷 1992）、キウス4遺跡Q地区P-85では、d類が入江式と共に伴している（北埋調報152 2000）。これらの土器型式の編年的位置は、論者によって微妙に異なるが、概ね縄文時代後期前葉の範疇に含まれる。以上の点から、タプコプ式土器はa類が最も古く、続いてb類→c・d・e類が新しいという変遷が想定される。今後は、ほぼ同時期と考えられる道東の北筒Ⅲ式・同Ⅳ式を比較検討する必要があると考える。

宮戸4遺跡H-2では、c・e類に属するものが使用されている。同じ組み合わせによる使用例は、静川37遺跡で多く見られる（渡辺・工藤ほか 1992）。H-2より採取した炭化物を用いて、放射性炭素年代測定（AMS法）を行ったところ、補正C14年代で3660±40（yBP）という数値が得られた（第VI章第1節参照）。これは従来言われてきた、余市式土器群の「縄文時代後期初頭」という時期的な位置付けより若干新しい。自然科学的分析によりすべてが決定されるとは言い切れないが、ある程度判断材料として考慮するならば、H-2はタプコプ式の後半期に相当する時期の所産と推測される。

(5) まとめ

炉は人間の日常生活の中で、衣食住や団欒の中心的な「場」としての役割を果たしてきた。炉の用途は、屋内炉の場合、①食物の加工、②冬季の暖房、③照明、④火に対する信仰施設、⑤火気保有による獣からの護身、⑥用具類製作のための熱加工、などが挙げられる（目黒 1995）。屋外炉も同様の機能を有するが、屋外に選定する何らかの特別な理由があったと考えられる。H-2の場合、焼土中より黒曜石製の石槍・ナイフ、大量のフレイク・チップが出土しており、石器製作に關係する作業が行われたと推測される。鋭利な剥片が周辺に飛び散る作業は、居住空間でもある屋内では困難であったのであろう。また、焼土のフローテーションにより得られた炭化種子などの微細遺物を分析する予定であり、その結果によってさらに別の用途が明らかになる可能性がある（第VI章第4節参照）。

炉材として土器を使用する意図は何であろうか。付近に礫を採取できるような河川がない場合、選択の余地が無く、他の材料を用いざるを得ない。しかしながら、本遺跡ではすぐ近くのイモッペ川で容易に手ごろな礫が採取でき、実際に米原4遺跡A地区では礫を用いた屋外炉（S-1）が検出されていることから、ことさら土器にこだわる理由がない。当該期の土器片囲い炉が様々な地域で広範囲に見られることを考慮すると、生活様式の一部として普遍的に存在していたと考えられる。

イモッペ川流域では、縄文時代中期後半～後期前葉に集落が営まれている。一般的な土器編年に従えば、炉の形態は以下のように変遷する。①柏木川式期：地床炉（米原4遺跡・H-4）、②北筒式（トコロ6類）期：石囲い炉（米原3遺跡・H-1）、③余市式（伊達山式）期：石囲い炉（米原3遺跡・H-2）、④タプコプ式期：土器片囲い炉（宮戸4遺跡・H-2）。各時期の炉の形態については、来年度に、この地域の集落構造を検討する中で考察したいと考えている。（芝田）